

第10回 中心部震災メモリアル拠点検討委員会

- 日時 令和2年10月12日(月) 10:30~12:00
会場 TKP ガーデンシティ仙台勾当台 ホール1
(インターネットを通じたビデオ会議併用)
- 出席者 [会場] 遠藤智栄委員、大泉大介委員、佐藤翔輔委員、佐藤泰委員、
野家啓一委員、本江正茂委員
[オンライン] 志賀理江子委員、マリ・エリザベス委員
[欠席] 植田今日子委員
- 議事 1 開会
2 議事
(1) 中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告書について
(2) その他
3 閉会
- 配付資料 資料1 第9回中心部震災メモリアル拠点検討委員会における主な意見
資料2 中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告書(案)
資料3 中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告書 概要版(案)

○事務局(平嶋室長)

防災環境都市・震災復興室の平嶋です。

本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。

定刻でございますので、只今から第10回中心部震災メモリアル拠点検討委員会を始めさせていただきます。

本日の議事進行につきましては、いつものように委員長にお願いしたいと存じますので、野家委員長、よろしくお願いいたします。

○野家委員長

はい、皆様、よろしくお願いいたします。

今日が最後の委員会になります。限られた時間ではありますが、皆様から意見をいただいて、報告書の最終的な仕上げに向けて調整したいと思います。

それでは、会議は次第に沿って進めてまいります。まず会議に係る留意点等につきまして事務局から説明をお願いいたします。

○事務局(平嶋室長)

それでは、初めに傍聴の方へのお願いでございます。

本日お配りしております「会議の傍聴に際し、守っていただきたい事項」、こちらをお守りの上、傍聴席以外に立ち入らないようお願いいたします。

また、受付でも確認してございますけれども、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、発熱や呼吸器症状がある方につきましては傍聴をご遠慮いただきますようお願いいたします。

また、会議中はマスクを着用いただきますようお願いいたします。

次に、本日の参加状況についてご報告いたします。

本日は、植田委員より欠席する旨の連絡をいただいておりますが、委員9名のうち8

名に参加いただいておりますことから、要綱第5条第2項による定足数を満たしていることをご報告申し上げます。

なお、本日、志賀委員及びマリ委員はオンラインで参加いただきます。

本日の資料でございますけれども、次第、委員名簿、座席表、資料一覧、資料1から3をお席に置かせていただいております。また、オンラインで参加いただく委員の方につきましては、同様の資料を事前にお送りしております。

本日も議事録を作成いたします。ご発言の際はマイクを使ってお話してください。志賀委員とマリ委員におかれましては、通信や機器の状況によって音声聞き取りづらい場合、再度ご発言いただくことがございますので、ご了承ください。こちらの音声聞き取りづらいというときには、その旨お知らせいただきますようお願いいたします。

事務局からの留意点等は以上でございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。それでは、議事に入る前に本日の議事録署名委員を指名させていただきます。本日は大泉委員にお願いしたいと思いますが、大泉委員、よろしいでしょうか。

○大泉委員

はい。

○野家委員長

ありがとうございます。それでは、本日の議事に入ります。まず1番目の議題「中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告書について」です。

前回の議論の振り返りと報告書の内容について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（佐藤課長）

それでは、資料1「第9回中心部震災メモリアル拠点検討委員会における主な意見」をご覧ください。

時間が限られておりますことから、内容をかいつまんでご紹介させていただきます。

まず、1番目の項目「本報告にあたって」についてです。こちらは、本拠点が東日本大震災はもとより、これから起きる地震、津波、洪水、感染症など様々な災禍を視野に入れて災害文化をつくろうとしている中において、新たな出来事が直前に起きた災害の記憶を風化させる契機になったこともございますことから、新型コロナウイルスについても言及した方が良いのではないかといったご意見をいただきました。

2番目の段落といたしましては、検討委員会として1日も早い拠点の整備を求めることを記載すべきではないかといったご指摘をいただきました。

次に、「1(1) 東日本大震災の概要」についてのご意見でございます。

こちらについて、福島第一原発だけではなく、沿岸部にあるほかの原発についても記載した方が良いのではないかというご意見と、被害の数字については仙台市のみならず東北全体も記載した方が良いのではないかとといったご意見をいただきました。

一方で、本報告は仙台市の震災メモリアル拠点を検討する前提として、震災の概要を記載するものであるということで、東北の被害や原発事故の全てを詳細に記載する必要はないのではないかとのご意見もいただきました。

次に、「3 本拠点の役割」についてでございます。

こちらについて、拠点を媒介として災害文化を不断に創出する取組みが必要であり、その具体例として仙台オリジナルのプラーク（銘板）づくりをいれてはどうかというご提案を植田委員からいただきました。

同じく植田委員の提案でございます「恒常的な実践」や「不断の創出」といったキーワードにつきまして、資料に追加した方が良いのではないかとご意見をいただきました。

4 番目の段落といたしましては、この拠点における取組みの全てを自分だけでやるのではなく、多様な主体が記録してきたものを共有し、生かしていくための活動を展開することも記載した方が良いのではないかとご意見をいただきました。

次に、「4 本拠点の役割を果たすための仕組み」についてでございます。

本拠点の役割と仕組みの章について、重複感が出ないように記載内容を整理した方が良いのではないかとご意見をいただきました。後ほど内容をご説明いたしますが、このようなご意見を踏まえて構成を見直したところでございます。

次に、「4 本拠点の役割を果たすための仕組み」の比喻（メタファ）についてでございます。

前回の資料の中では、記憶と創造の樹という表現を用いたところですが、今回の議論をしっかりと表現するために、一番根気の要る「継承」も加え、「記憶と継承と創造の樹」と記載した方が良いのではないかとご意見をいただきました。

また、前回の資料で記載がございました「みんなの庭」という表現について、「みんな」という言葉には協調性を強いるような意味合いや排他性を感じさせるというご意見をいただきました。このことについて、別な表現を記載した方が良いのではないかと、そもそも「庭」という概念が必要かどうかなどというご意見をいただきました。

また、志賀委員からご提出いただいた絵についてでございます。

こちらの絵については、志賀委員が委員会の議論を通じて感じ取ったことを表現した作品であり、報告書の内容と無理にすり合わせようとせず、委員個人の作品という位置づけで紹介した方が良いのではないかとご意見をいただきました。こちらにつきましても、本日改めてご議論いただければと思います。

次に、「5 本拠点の役割を担う主体」についてでございます。

こちらは、主体という言葉は抽象的な印象を受けることから、「拠点の運営を支える組織」と明記した上で「様々な主体との連携」と記載した方が良いのではないかとご意見などをいただきました。

次に、「7 今後の検討における留意事項」についてでございます。

本拠点の核となる機能が何か、機能分担をどこまで許容するかを考えた上で、連携のあり方を議論した方が良いというご意見をいただきました。

また、2 番目の段落ですが、仙台市において様々な施設の計画が進められている中において、それらとの一体的整備や統合的配置のようなことが検討に値するというご意見を記載しても良いのではないかとご意見をいただきました。

また、ハードウェアの整備だけが本報告の趣旨を実現するための手立てではなく、施設を物理的に持つよりも、できる活動から始めつつ、活動を通じて拠点の方向性をさらに考えていく体制を整えることを最優先すべきではないかとご意見をいただきました。

大まかではございますが、資料1の説明は以上です。

続きまして、資料2「中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告書（案）」をご覧ください。

こちらにつきましては、前回の検討委員会でのご議論を踏まえ、委員の皆様と調整し、作成したものです。前回から全般的に見直している部分がございますことから、項目ごとに記載内容を説明させていただきます。

まず、ページを2枚めくっていただき、1ページ目をご覧ください。

こちらは、「本報告にあたって」の委員長の言葉でございます。野家委員長からご意向をいただきまして、前回から見直しを行ったところでございます。

また、見開きの左側にある絵ですけれども、こちらの絵は拠点のイメージをモチーフに、志賀委員に作成いただいたもので、今回3つのパターンをご提示いただいておりますが、そのうちの1つを仮に掲載しているものでございます。

次に、2ページ目をご覧ください。「(1) 東日本大震災の特徴」のページでございます。

こちらは、前回「東日本大震災の概要」という名称でまとめていた項目でございます。前回の議論を踏まえまして、物理的な事象のみならず、その経験がどのような意味合いを持つのかという視点も含め、東日本大震災の特徴という項目でまとめさせていただきました。「巨大地震がもたらした想定を超えた被害」「日常を取り戻そうとする人々の歩み」「仙台市における被害と周辺市町村との関わり」、これらの項目で構成しております。

次に、4ページ目をご覧ください。「(2) 東日本大震災の経験を伝えることの困難さと重要性」についてでございます。

ここでは、世代を超えて記憶や経験を伝え、生かすことの困難さと重要性とともに、デジタルカメラやスマートフォンなどが普及し、多くの情報がありながら、それをもとに幅広い実相を捉えることの困難さと重要性についても記載しております。

次に、5ページ目をご覧ください。「2 本拠点のあり方」でございます。

項目の全体像については大きく変えてございませんが、その記載内容について調整を行っております。

また、その流れの中で、これまでの検討過程における意見を総括的に枠書きで記載しております。

次に、9ページ目をご覧ください。「3 本拠点における取組み」でございます。

こちらについては、その次の項目でございます「4 本拠点の取組みを展開するための仕組み」との記載内容を整理し、構成の違いを明確化するように調整したところです。

次に、11ページ目をご覧ください。「4 本拠点の取組みを展開するための仕組み」でございます。

前回は「記憶の根」「継承の幹」「創造の枝」「みんなの庭」という4つの言葉で表しておりましたが、けれども、「みんなの庭」という概念については前回の議論を踏まえ、「創造の枝」に取り込み、3つの表現にまとめた上で、それぞれの記載内容を再整理しているものでございます。

次に、13ページ目の「5 本拠点の取組主体」、14ページ目の「6 立地の基本的要件」、15ページ目の「7 今後の検討における留意事項」、これらは内容に関する若干の文言整理を行ったところでございます。

駆け足ではございますが、資料2の説明は以上でございます。

続きまして、資料3「中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告書概要版(案)」でございます。

こちらは、只今ご説明いたしました報告書の概要をまとめたものです。報告書の全体構成を1枚で表すために、情報量を圧縮して記載しております。

事務局からの説明は以上でございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。それでは、報告書について話し合っただけでまいりたいと思います。

最初に、先ほど事務局と相談したのですが、1 ページとその左側の志賀さんの絵について、これらを入れ替え、最初の左側に「本報告にあたって」を、その右側に志賀さんの絵を入れた方が良いのではないかという提案を受けました。これについてはいかがでしょうか。何かご意見がございましたらお願いします。

○本江副委員長

本江です。入れ替える件は賛成です。野家先生のお話が最初にあって、それを受ける形で志賀さんの絵がある方が素直で良いかと思います。

○野家委員長

ありがとうございました。

志賀さん、いかがでしょうか。

○志賀委員

はい。私もそう思います。ただ、小さく印刷されたのは何か理由があったのでしょうか。

○野家委員長

これは技術的な問題でしょうか。

○事務局（佐藤課長）

こちらの印刷については、印刷の技術的な問題でございますので、確定版の際はもう少し大きくしたいと思います。

○志賀委員

分かりました。例えば、種をまいて、穴を掘っている若者と子供が映っているとか、いろいろな時間を重ねて、いろいろな経験や思いが重なって見えるように細かい部分を変更していますので、大きく印刷していただければありがたいと思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。それではご希望に沿いたいと思います。

今回、資料2として別バージョンの絵が2枚ありますが、これらの違いについて、志賀さんから説明いただけますか。

○志賀委員

はい。それでは、画面共有をします。

最初の絵ですけれども、前回から細かいところが変わっています。ここに若者と子供が穴を掘っているという情景をプラスしていて、1枚目には何の言葉も載せていません。樹の下に集まる人がネガに反転して、姿が少し変わったり、いろいろなものが少しずつ変わっています。この樹の写真は、震災から1か月後に名取の砂浜で撮ったもので、津波で流された樹をもう一回立て直しています。これが震災当日で、この穴を掘る人たち

は、海で最近撮ったものです。つまり、10年間の時間がこの中に入っています。

次の絵がこれです。構図は大体同じですが、ここに眠っている人と、眠っている人を抱えている小さな子供が映っています。

タイトルでいろいろな言葉を載せるのも良いかなと思ながらも、重要な言葉は野家さんの最初の文章に要約されていると思うので、私がこの会議に参加して震災に対してどう思うかを思い直したかということを書いています。この絵を受けて、少しでも先のことを見られると良いなと思います。

もう1枚がこれです。これも構図は変わっていませんけれども、眠っている人が反転せずにポジの状態です。見比べると分かるのですが、2枚目はネガに反転したもの、3枚目はネガに反転していないものです。時間を遡るような意味でネガ・ポジの反転をしてみました。彼ら目覚めている子供は、反転せずにポジの状態にしています。

この10年近くの間、復興と言われ続けてきたなかで、復興という言葉の裏にあることを顧みないままに10年間過ごしてしまったかもしれないという思いが強くなります。

本当に豊かなこととは人間にとってどのようなことなのか、9年目にして新型コロナも発生する中で、自分たちの生活をもう一度見直さなければ、これからの時間がとても厳しいものになるのではないかという疑問が、また浮かび上がってきました。

本当の豊かさみたいなことを考えていくと、人間はどういう存在なのか考えざるを得なくて、そこに東北という地が持つ歴史を複雑に絡み合わせていく中で出来た3枚です。

好みもあるし、報告書に付けるのにふさわしいかどうかもあるけれど、単にほんわかしたものではないかとも思っています。悩みに悩んで結果的にこの3枚になりました。どれが良いか決められなかったのですが、今回、ご意見をいただけたらと思っています。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。志賀さんとしては、報告書に入っていて、メッセージとかが一番入っているバージョンがお勧めということになりますか。

○志賀委員

そうですね。このどちらかになると思います。今日の会議を終えてみて、言葉を書き直してもいいなとも思いますが、いろいろな葛藤の言葉が絵の上に載っていた方がいいような気がしています。

○野家委員長

はい、わかりました。僕もなるべくメッセージが入っていた方が分かりやすい気がします。それでは、ほかの委員の方から、この絵について少しご議論いただければと思いますが、いかがでしょうか。

○佐藤（泰）委員

佐藤です。この3つについて、私はどれも捨てがたいという感じがしていて、1つを選ぶよりも、3つの作品があっても良いのではないかと思います。

志賀さんが言葉を書き換えるかもしれないとおっしゃったということは、言葉を書きしていないものが作品のベースになるということであって、見る人が絵に触発されて、それぞれの思いを絵の上に載せていっても良いのではないかなと思います。

私の主観的な印象ですけども、震災で写真が流され、それが拾い集められたことを思い出します。そこにはいろいろなものが映っていて、かすかに残っているものや、薄

くなっているもの、鮮明に見えるものなど、いろいろなものが混じり合っていて、それが時間の経過とともに薄くなったりするようなイメージを持ちました。震災を含めた時間の流れを、言葉の無い絵の中に感じたし、そのような可能性を残すためにも、3つの作品を扱うという考えもあるのではないかと思います。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。ほかにこの絵に関してご提案、ご感想ありましたらお願いします。はい、翔輔委員どうぞ。

○佐藤（翔）委員

佐藤翔輔です。志賀さん、どうもありがとうございます。

これは志賀さんのお考えを掲載するという趣旨ですので、志賀さんに決定いただいて良いのではないかと思います。ちなみに、私も佐藤さんと同じ意見で、どれもあった方が良いかなとは思いますが、最終決定は志賀さんで良いと思います。

○野家委員長

はい。それでは、今の意見を踏まえて最終的に志賀さんに決定いただくということでお願いします。

○志賀委員

はい。それと、この写真は、私だけで制作したのではなくて、映っている人や制作に携わった人のチームワークでつくっていますので、説明文のところに携わった人の名前を連ねても大丈夫でしょうか。

○野家委員長

事務局の方、共同で作業してくださった方の名前を表記することは構わないのでしょうか。

○事務局（佐藤課長）

そのような形で差し支えないと考えてございます。記載方法については、志賀委員と改めて調整させていただければと思います。

○志賀委員

はい。よかったです。ありがとうございました。

○野家委員長

ほかはよろしいでしょうか。今出た意見を参考にしながら、最終的な決定は志賀さんにお任せしますので、レイアウトを含めてお願いしたいと思います。

それでは本文の方に入っていきます。どの部分からでも結構ですので、該当箇所を示しながらご発言いただければと思います。

最初に私からですが、9ページ目の(2)の「取組みの具体案」に「震災の記録や資料の提示、市内各所で震災の経験を記した銘板づくりを進めるなど」と出てきます。「銘板づくり」だけだとイメージが湧きにくいので、「銘板づくり（プラーク）」と記載していただければと思います。本日、植田委員は欠席ですが、植田委員がヨーロッパ旅行をさ

れて、強い印象を受けて提案された事柄ですので、そのように括弧してプラークという言葉を入れたらどうかと思います。そうすれば、海外の事情に少し詳しい方は「あれのことか」と気付くと思います。

そのほか、何でも結構ですので、気がつかれたことなど、ご提案をお願いします。皆様はこれまでに報告書を何度も読み直して、修正の余地がほとんどないところまで来ておりますので、大幅な組み替えは難しいかもしれませんが、微修正程度なら可能かと思えます。はい、どうぞ。

○大泉委員

大泉です。15 ページ目の「今後の検討における留意事項」の③事業を担う主体のあり方のところですか。もしかしたら言葉の意味として既に含まれているかもしれませんが、人の確保について「継続的な人材の確保の方策、人員規模、組織構成など」とありますけれども、私はここに「待遇」を入れていただきたいと思えました。継続的な人材の確保には待遇も含まれていますと解釈可能ですけれども、今の被災地の語り部さんの確保とか、発信の継続性を鑑みたときに、待遇が現実的な問題として結構大きいと思えます。市民参加イベントでもそうした発言を我々は聞きましたので、ここに「待遇」を加えていただくのはいかがでしょうか。

○野家委員長

「事業を担う主体のあり方」の中に、「継続的な人材確保の方策、人員規模、組織構成」とありますが、そこに「待遇」という言葉を入れてはどうかというご提案です。我々の委員会で何度か出てきた事柄でもありますので、「待遇」という言葉をそこに加えたいと思えますが、よろしいでしょうか。

それでは、そのようにさせていただきます。

ほかに気がつかれたことがありましたら、どなたからでも結構ですので、お願いします。よろしいでしょうか。

それでは、この1年9か月にわたって様々なご提案をいただきながら議論を重ね、ようやく報告書がまとまるという段階に来ております。報告書が出来上がるまでの過程を振り返って、感想、あるいはこれからの期待や希望などにつきまして、委員皆様に、1人3分から5分ぐらいでご発言いただければと思います。

はじめに佐藤泰委員からお願いします。

もちろんこれが終わりではありませんので、後からまた発言していただいても結構です。

○佐藤（泰）委員

気付けば結構長い時間にわたりこの議論が続いてきたのだということを思い起こしています。

この会議で出た様々な意見や、市民の皆様との意見交換の中で出てきた様々な意見を報告の中に十分組み込めたかどうかについては、分からない部分もないわけではないのですが、今回の報告書だけではなく、これまでの委員会のプロセスを含めて、今後共有され、場合によっては議論が再び繰り返されるようなことがあっても良いのかなと思えます。

委員会は、この報告書を出すことによって終わりますけれども、実際はこの先が本当に重要なわけで、仙台市として報告書を受け取って、それをどのように具体的な動きに

落とし込んでいけるかというあたりが、ものすごく大変だし、我々はこの委員会に参加したメンバーとして、あるいはこの委員会の検討のために集まった様々な方々が関係者として、育っていく様を見続けつつ、必要に応じて「違うんじゃないの」「そうだったんだね。こっちの方がよかったかも」と言ったりしながら、進んでいけたら良いのかなと思います。

震災から10年が経過して、いろいろな意味で風化してきているし、今は感染症のことがあって、いろいろな難しい局面で、震災のときとは違う経験をしているわけです。けれども、そういった経験が積み上がって、ちゃんと伝わっていくシステムというのが、このメモリアル拠点をつくるなかで反映されていくのだと思います。このメモリアルが10年前のことを振り返るだけでなく、これから起きる災害のことも受け止め、未来を支えていく社会的なシステムとして育っていくことになれば良いのかなと思います。

○野家委員長

ありがとうございます。次は佐藤翔輔委員、お願いします。

○佐藤（翔）委員

ありがとうございます。まず、今回の検討委員会につきましては、御礼を申し上げたいと思います。

1つ目は、これだけ回数多く、かつ皆様の意見を1つずつ積み上げていただいた委員会というのは、私これまで経験したことがございませんので、仙台市の方、委員長、副委員長の先生方に改めて御礼を申し上げます。

2つ目は、これだけいろいろな立場の人を集めた委員会もなかなかないと思います。この委員会では、私が普段使わない脳みそをいっぱい使う機会があって、多くの刺激をいただきました。改めて御礼申し上げます。

報告書の中については、2点御礼があります。今回「災害文化」という言葉がキーワードの一つになっていますが、そこをかみ砕いて、「災害とともに生きる文化」と解釈をしていただきました。これは、仙台市のような都市的な場所において災害文化という言葉をなじませるための工夫で、大変ありがたいと思います。それと、途中まで人材のことがあまり入っていなかったわけですが、それを途中で入れていただいたことも、仙台市の英断かなと思います。どうもありがとうございました。

これからに向けてのコメントは2つあります。野家先生が冒頭の文の中に「体験」と「経験」という言葉を分けて書いてくださいました。今、別な事業で被災地のこういった施設を回って調査する中で、「体験」の記述に留まっているところが多いというのが改めて分かりました。情報を昇華して、インテリジェンスに結びつけていない施設や展示が、大変多くあります。つくったのが5年後、7年後だからということで、時間がストップしています。「体験」を「経験」にするという部分と、たゆまなく災害文化を創造し続け、表現し続けるという部分については、他の市町、他のエリアにない姿勢、宣言だと思いますので、ぜひ今後ともよろしく願いいたします。

あと、昔からゲートウェイという言葉を使っていながら、ゲートウェイと言えるほど他の場所のことを知らず、実現できている場所はあまりないと思います。この拠点がゲートウェイと言うのであれば、ここを担う人材が他の事を知ることが大事ですので、他をいかに知るかというところにもぜひお力を注いでいただければと思います。

私からのコメントは以上でございます。ありがとうございました。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。それでは大泉委員、よろしく申し上げます。

○大泉委員

このような場に関わらせていただきまして、ありがとうございました。

今、概要版を見ながら、一つ一つの言葉を振り返ってみると、その時々議論のやり取りが思い起こされます。例えば震災の経験を伝えることの困難さというのは、最初に「一言では言えないよね」「これをどう伝えるかって難しいよね」「その難しさを引き受けるところから始めましょう」という議論を重ねる中で書かれた項目であって、1年半以上前の議論を思い起こしながら、見ていました。

報告書については、かなり多面的で、何かを排除せず、いろいろな視点からの議論をほぼ網羅した報告書だというのが私の印象です。特に報告書の中に四角く囲って、様々な意見があったこととか、具体例としてアイデアが出ていたことを網羅したというのは、仙台市の事務局さんが頑張っていたところ、一つにまとめるという方法もあったと思いますけれども、やはり困難さがある中で、それをつぶさにまとめたというのは、報告書のまとめ方としても学ぶべき点が多かったと思います。

一方で、これを市民目線で考えると、明快さを欠くとか、単純化されていないことによる分かりにくさをはらんでいて、物足りないと感じられる方もいらっしゃると思います。けれども、それは震災を伝える困難さをどう考えますかというところでご理解いただけるのかなと思います。

最終的にどんなものをどんな場所という政治判断、議会の判断が求められる局面が来るのかなと思いますけれども、我々としてはできるだけ細部に目配りをしたつもりなのかなと思います。特に委員長には冒頭の言葉として我々の言わんとするところを包含し、まとめていただいたことにも感謝と敬意を表したいと思います。ありがとうございました。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

それでは、続きまして遠藤委員、お願いします。

○遠藤委員

今までのお礼から始まりますけど、ありがとうございました。

私は、今も被災した人たちやその組織に関わらせていただいておりますので、大事ですけど、できていないことがまだまだあるなと思いながら、最終版の報告書を確認させていただきました。

そういった私の思いが、野家先生に冒頭でお書きいただいた「本報告にあたって」と重なっていて、特に「事故とか災害の後にスペースが生まれるけれど、もたもたしているとスペースは閉じてしまう」というあたりは、地域の人や被災地と日々関わっている身としてひしひしと感じていて、起こったことをどう創造的につなげていけるのかということに、もがいているような状況です。「記憶と継承と創造の樹」という言葉に対して、自分もこのような活動しているのだということを実感いたしました。

ただ、言語化されていない記憶がまだまだたくさんありますし、継承で止まっていて、人の命や地域の持続可能性を高めるような創造の段階に進むことが難しいということもあります。仕組みを表すキーワード「記憶」「継承」「創造」が実現できるような拠点がで

きたらいいなと本当に実感をしております。

先ほども他の委員の方がおっしゃったように、震災で時を止めるのではなく、時代にも寄り添って変化を続けていく拠点であることに期待したいと思います。

ありがとうございました。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

それでは、マリ委員、お願いします。

○マリ委員

はい、ありがとうございます。

私は委員になるのが初めてでして、このような機会をいただきまして、ありがとうございます。

いろいろな人と一緒に幅広く議論を進めるなかで、伝承とは何かを考えたり、自分のことを振り返る良い機会になりました。それと、仙台市の皆様にはこれまでの議論を丁寧にとりまとめていただきました。ありがとうございます。

仙台のアイデンティティーや東日本大震災の全体的なもの、ネットワーク、ゲートウェイなどが具体的にどのような形になるのか、まだ答えられないこともあると思いますが、興味深く楽しみです。具体的な形になるのはまだこれからだと思いますけれど、今回の議論を通じて前に進んでいるという感じがします。

以上です。ありがとうございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

それでは、志賀委員、絵の件ではご苦労いただいたかと思いますが、その辺も含めてお願いいたします。

○志賀委員

野家さんが書かれた文章の最後に、アメリカの歴史家ジョン・ダワーの本から「すべてを新しい方法で、創造的な方法で考え直すスペースが生まれる」と引用されていますけど、「すべてを」と言うときに思うことがあります。それは、震災でフラットになった状況を資本主義は復興という名のもとで都合よく使ってきたのではないかということ。私自身としてはそのことに圧倒され続けた10年間だったからです

私が住んでいた名取市の北釜は、震災から1か月しないうちにリゾートカジノを誘致しようという働きかけが外部からありました。この巨大な資本による計画があまりに早い展開でやってきたことに、私は非常に驚きましたが、災害でフラットになったところは、資本主義にとって非常に都合がいいとも言える。

福島はまさにそうですが、震災後の資本主義的な復興によって切り捨てられたり、無理やりなことがまかり通った現実もあります。それだけではなく、海や山や農業という第一次産業に関わる人たちの生活の立て直しを見ていると、今でも2つに引き裂かれるような気持ちになります。あのときに世界が終わってしまった人たちがたくさんいる中で、震災でもたらされた心の揺れや引き裂かれた気持ちは、全く覚めやらず、鎮魂までなかなか至れないというのが正直な気持ちです。復興という名のもとに行われたことが実際にどうだったのかということ、今後の時間の中で必ず学んでいかなければいけな

いとも思います。

ここで語られたことが、この拠点の中にどのように生かされていくのかということを見ていきたいし、また関わっていききたいなど真剣に思っています。

たくさんの経験をさせていただいて、ありがとうございました。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

それでは、この委員会は実質的に本江副委員長にリーダーシップを取ってもらって進めていただいたようなところがありますので、その辺のご苦勞を含めて、本江副委員長に総括をお願いできればと思います。

○本江副委員長

野家委員長からそう言われると恐縮ですけれども、長く続いたこの委員会の報告がこうしてまとまったこと、確かに大変感慨深いものがございます。

「本拠点の位置づけ」にある、仙台市の震災復興メモリアル等検討委員会が、メモリアルの議論を始めたのが、もう7年前です。僕はその委員会にも入れていただきましたが、そのときに中心部拠点と沿岸部拠点はそれぞれ役割が違うから2拠点が必要で、単純な同心円ではなくて楕円みたいにやるのだということを言っていました。ただ、正直なところ、その委員会で中心部拠点と言ってはみたものの、図式的なアイデアに過ぎなくて、このようなことが何かしら必要ではないかというところどまりだったように思います。

それが、今回の委員会を通して、非常に具体的なものとして血肉化できたことに、改めて感慨深く思います。

逆に言えば、このような議論のためには、7年間の経験が必要だったし、メモリアル交流館や荒浜小学校の経験があって、それを踏まえて、この中心部の議論ができているのだと思います。

でも、先ほど大泉委員がおっしゃったように、多面的にはなっているものの、まだまだピントがしっかり合っていないと言われればそのとおりです。先の委員会から7年、震災から間もなく10年が経つ中においても、まだまだ消化しきれないことがあるということで、対象の巨大さと複雑さが現れているものだと思います。

ここまでは思い出の話です。

少々実践的な話をすると、今回の件とは別に、僕は震災遺構として最近オープンした山元町の中浜小学校のデザインに関わっています。短い時間でテレビにも結構取り上げられて、1万人ぐらいの人が来てくれました。

人口1万2,000人の小さな町ですけれども、震災遺構をオープンするまで教育委員会が非常に頑張ってくれましたし、ボランティアの語り部グループも若い人を入れながら、継承に向けて頑張ろうとしています。でも、やはり限界はあって、自分たちの町で起こったことを継承していくので精一杯です。今回の報告書の中で、「記憶」と「継承」と「創造」と3つのことを言っていますが、継承までで精一杯です。

これに対して、仙台市の中心部拠点では、記憶のこと、アーカイブのことをきちんとやると言い、それを未来につないでいく文化を創造すると言っている。メモリアルのことをやってきて、そこから広げていることは大変に立派なことなので、言った限りはしっかりやってくださいということを改めてお願いしたいと思います。

この委員会の中でも、こんなに風呂敷を広げてしまって、仙台市は本当にやれるのか

みたいな話を何度かしたと思います。これは委員会としての提言なので、それを引き受けてどうするかは、これからの話ですが、小さな町にはできないことでも、仙台市ならできるとあるし、やらなければいけないと思います。県や国がやるのと、同じ基礎自治体として仙台市がやるのでは、違う意味があると思いますし、仙台市にはその責任があると改めて思います。

特にきちんとしたアーカイブをつくって、それを研究的に生かしていくことは、小さい町にはなかなかできないので、仙台市はそのようなこともきちんとやり、そのための人も手当てもやってほしいと思います。

それと、災害とともに生きる文化を創造することに関して2つ言います。

1つ目は、プラークとか、行事をつくるとか、歌をつくるとか、いろいろなアイデアを入れています。我々の思いつくことはいろいろ書いているけれども、まだまだアイデアが足りない。市民と協働して、たくさんのアイデアを出していくという実践が必要だと思います。

2つ目は、災害とともにある文化を創造する仙台市ということで、これからの仙台市のすべての政策に災害文化の観点が織り込まれなくてはいけないと思います。まちづくりでも、産業振興でも、福祉でも、教育でも、仙台市が何かをするときには、いつも災害文化創造の観点から見てどうかというチェックが必ず入るようなプロセスになると良いと思います。防災政策にこの観点が入るのは当たり前ですけれども、全く関係ないような政策にも災害文化創造に向けてのチェックを働かせ、それを積み重ねることで、災害文化を持つ都市という仙台のアイデンティティーが作られるのだらうと思います。そのあたりも是非お願いしたいと思います。

以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

それから、今日残念ながらご欠席だったのですが、植田今日子委員からメッセージをいただいておりますので、私の方で代読させていただきます。

「中心部震災メモリアル拠点検討委員会が担った仕事は、震災後の仙台市の災害文化を維持ないしは更新・創造し続けるための環境づくりの一端だったように思います。大変難しい取り組みでしたが、委員の皆様とご一緒できたおかげで、そして仙台市職員の皆様の多大なお力添えのおかげで報告書にあるような形となったように思います。

メモリアル施設などなくとも、災害がやってくることを当然のように受け止め、可能なかぎりその衝撃を緩衝し、当たり前のように助け合う社会であれば、理想的なのかもしれません。しかしこのプロジェクトでも議論されたように、どれだけ時間を経ても遺族の痛みは簡単に癒えることはなく、しかし世代が替わるにつれて災害に備えることは忘れられてしまうのでしょうか。

災害文化を都市が身につけることは難しい課題なのかもしれません。ですが、それは来たる災害と多様な災害弱者とを、絶えず思いながら日々の物事を進めていく「温かい都市」を目指すことと同義のように思います。そのためには何より、多様な人たちが絶えずコミュニケーションしていることが必要なのだと思います。

中心部震災メモリアル拠点検討委員会の一委員として関わる機会を得て、非力でしたが大変光栄でした。任期半ばで体調を崩し、最後まで委員の役目を全うできなかったことを大変申し訳なく思います。

委員の皆様、仙台市職員の皆様、大変お世話になりました。今後とも市民の皆様には

遠慮なく率直な声を届けて頂ければありがたく思います。

どうもありがとうございました。植田今日子」

以上でございます。

それでは、最後に私の方からお礼とともに簡単な感想を言わせていただきます。去年の1月にこの委員会が立ち上がりましたが、この2年近くにわたって仙台市役所の担当者の方々、とりわけ今は別の部署に移られましたが、庄子希恵前課長には大変お世話になったことを、この場を借りて御礼申し上げたいと思います。

それから、最初の頃は皆様に自由に意見を言っていたいて、本江副委員長がファシリテーターとしてホワイトボードがいっぱいになるほどいろいろな意見を書いてまとめていただいたことを思い出します。いろいろな意見が四方八方から出て、果たしてどうまとめたらいいかと少し心配になったこともありました。この報告書まで至り着く道筋を整備してくださったことに対し、本江副委員長には厚く御礼を申し上げたいと思います。

ただ、この報告書はあくまでも出発点です。これからどうなるか、海のものになるか山のものになるかも見当がつかないような状態ですが、とにかくスタートラインについてということだけは確実ですので、今後とも委員の皆様には様々な方面からご協力をいただければと思います。「仏つくって魂入れず」ということわざがありますが、この報告書に魂を入れるのはこれからの市役所の担当者の方々と同時に、これまでにいろいろな意見をいただいた市民の方々の協力を得ながらやっていかなければいけないことだと思いますので、よろしくご協力をお願いしたいと思います。

それから、先ほど翔輔委員から、私が序文に書いた「体験」と「経験」に関するコメントをいただきました。「体験」は直接的で、その場限りのものに終わってしまいがちです。それを震災遺構やこのようなメモリアル拠点を活用したり、様々な文化・芸術ともタイアップしながら言葉や音楽にすることで、災害文化をつくっていくのだと思います。

ハイデガーという哲学者の本に「時熟」という言葉が出てきます。時を経るにしたがって熟していくという意味で、人間が生きていくということは体験から経験への変換を経て、次第に熟成していくということであって、熟成の第一歩がこの報告書だったのではないかと考えております。

先ほど大泉委員から指摘がありましたように、報告書は、全ての論点が詰まった網羅的なものになっています。網羅的には、良い面と悪い面があって、悪い面は総花的、八方美人的ということで、いろいろなことが書いてあるけれども、具体的に一步踏み出そうとすると、どういう方向なのかエッジが効いていないところがあります。個人が1人でまとめればエッジが効いた報告書になろうと思いますが、それでは抜け落ちる論点が出てきます。網羅的というのは、むしろ我々の委員会が多面的に検討した結果であって、そこに光が当たると乱反射して、別な側面も見えるような働きではないかと思えます。そういう意味では、時熟とともに、いろいろなところからこの報告書に光を当てていただき、乱反射する中で出てくる万華鏡のような像を、それぞれの領域や分野で活かしていただければ、この報告書を提出した意味が出てくるのではないかと思います。

それと、この委員会では、市民の方々と交えて意見を伺う機会を2度つくりました。そのときにいただいた市民の意見が、この報告書の端々に表れていて、そのことは、この報告書を公表して、皆様に読んでいただくにあたって大変重要なことかと思えます。

今回のメモリアル拠点は、ある一部の方々や仙台市の担当者だけがつくっていくわけではありません。これから市民の方々に育ててもらい、時熟ということが形になるわけですので、市の担当者の方々には、今後も市民の方々とサポート体制を形づくりなが

ら、進めていただければと思います。

2年間にわたり市の担当者の方々には大変お世話になりました。最後に委員長として厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

さて、まだ10分ほど時間がありますので、何か言い残したことなどございましたら、お願いします。

○佐藤（泰）委員

私はこの委員会を始めるに当たって、具体的なことを検討するにしても、最初にどれだけ遠くまでボールを投げられるかということがすごく重要だと思いました。ボールが遠くに行き過ぎて、見つからないような時期があったような気もしますが、みんなでボールを探しているうちに、災害文化をこれからどうつくっていくか、というキーワードに出会ったのがすごく大きくて、原っぱのような中で目指す方向を見つけ、それに向かって記憶とか、継承とか、未来に向けた活動を行なっていくというイメージを具体化していければ良いと思えたのは、自分としても良い経験ができたと思います。

先ほど皆様から、この事業を具体的に進めていくには、仙台市だけではなく、市民も含めて様々な人たちが一緒にやっていく必要があるということをおっしゃっていたと思いますが、まさにそこがこれからの重要なポイントだと思います。

先日、福島の大葉町に原発と福島の被災の状況を表す資料館ができたので、見てきました。個人的な感想になりますが、すごく固まっている印象を受けました。スタッフの表情も硬い感じがしたし、展示内容も選ばれたものが選ばれたように整理されていて、そこから始まったいまだ糸口の見えない問題や人々の割り切れない思いなどがきれいに掃除されてしまった印象を受けました。その印象が事実だとすると、公的なものとしてつくる中で、お金を出す人たちの考え方にも左右される部分があるのだと思います。残念だけど、経緯を考えればやむを得ないところもあると思いつつ、今後、仙台市の拠点が、施設として整備されていくのか、組織として整備されていくのか分かりませんが、役所や特定の団体の考えだけで進められること、あるいは、その中の都合で物事が決まらざるを得ない状況は避けなければいけないと思います。

震災の経験は、幅広い人に共有されなければいけないし、これが未来に伝わっていくためには、仙台市の果たすべき役割が重要である一方、市役所以外の人たちがどれだけ主体的にこの問題に向き合い、どのような活動をしていけるのかが問われていると思います。もちろん仙台市はそれに頼ってはいけなくて、それを支え、時には牽引する努力を最後まで続けていただきたいと切に思います。同時に役所の内向きな都合だけで何かが決まることだけはないようにしてほしいと私は願っています。さまざまな手続きを経ながら物事を進める役所にとって実はこれはすごく難しい問題で、簡単に初志を貫くことではできないかもしれないけれども、だからこそ、これを役所の担当の方々にお任せするだけではなく、周りがどのように支えていけるかが問われてくるのだと思います。そのような意味で、委員会が終わっても引き続き発言する必要があるのかなと思います。ありがとうございました。

○野家委員長

大変貴重な意見、ありがとうございました。

ほかに何かございましたら、よろしいでしょうか。

それでは、本日いただいた意見を踏まえて、報告書の最終稿を作成したいと思います。校正につきましては、委員長である私と副委員長である本江委員にご一任いただければ

と存じますが、よろしいでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、次の議事に移ります。

議事の2番目、「その他」ですが、事務局から何かございますでしょうか。

○事務局（佐藤課長）

本日も貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。

今回のご議論を踏まえまして、委員長、副委員長とも相談しながら、報告書を完成させていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

報告書の確定後、それを市長に提出する場を設けることとしております。具体的な日程や次第につきましては、改めてご連絡したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

事務局からの連絡は以上でございます。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。

それでは、委員の方々から、何か言い残したこと、付け加えることがありましたら。

よろしいでしょうか。

それでは、事務局の方に進行を引き継ぎますので、よろしくお願いいたします。

○事務局（梅内局長）

それでは、1年9か月にわたりまして、委員の皆様、ありがとうございました。

10回の会議ということですが、先ほどもございましたが、私どもとしても途中で様々な市民参加イベントなどございましたので、10回以上やったような、非常に濃厚な印象を持っております。

只今話がありましたけれども、この報告書を提出いただきまして、どうしていくかということでございます。今、遠藤委員にもお入りいただいて、新しい総合計画をつくっておりますけれども、その中でも防災環境都市のようなことをうたっております。私どもとして、防災環境都市という取組みを行ってきましたので、災害文化という言葉にあまり違和感なく取り組んでこられたという印象がございます。

実際に拠点ができるまで時間がかかるかもしれませんが、その間、ソフトで何をやっていくのかということも大事だと思っております。できるだけ早く実現に向けて取り組んでまいります。

長い間ありがとうございました。

○事務局（佐藤課長）

それでは、以上をもちまして本日の委員会は終了でございます。

どうもありがとうございました。